

# 社会学年報学派の宗教学思想・序説

——『社会学年報』宗教社会学セクションの構成を中心に——

*Prolégomènes aux recherches sur la science des religions dans l'école de l'Année sociologique*

山崎 亮 (Makoto YAMAZAKI)

Résumé : Les études religieuses de l'école de l'Année sociologique, que E. Durkheim, H. Hubert, M. Mauss et R. Hertz représentent, elles influent sur le développement de la théorie sur le sacré et le profane, et des recherches sur rites dans divers domaines, par exemple, la science des religions, la sociologie, l'anthropologie, etc. Mais, leurs études religieuses n'ont été traité que isolément et fragmentairement, et on n'a examiné jamais le contenu de leurs corobolations en ensemble. Dans cet article, j'essaie de rechercher le cadre des études religieuses, commun aux membres de l'école de l'Année sociologique, en analysant la constitution de la section-sociologie religieuse de l'Année. C'est une travail préparatoire pour examiner la science des religions chez cette école en son totalité.

[Key-Words : l'école de l'Année sociologique, la science des religions, E. Durkheim, H. Hubert, M. Mauss, R. Hertz]

**要旨** デュルケーム、モース、ユベール、エルツらに代表される社会学年報学派の宗教研究は、宗教学・社会学・人類学等、多様な分野における聖俗論や儀礼研究の進展に大きな影響を与えている。けれども彼らの宗教研究は従来、個別に取り上げられるに止まり、その背後にある緊密な共同作業の内実、さらには学派としての全体像はほとんど明らかにされていない。小論では、社会学年報学派の宗教学思想の全体像を検討していく予備作業として、学派に共通する宗教研究の枠組みを、『社会学年報』宗教社会学セクションの構成の分析から取り出してみたい。

【キーワード】 社会学年報学派、宗教学、デュルケーム、ユベール、モース、エルツ

## はじめに

二〇〇一年に刊行した著書<sup>〔1〕</sup>のなかで私は、デュルケーム宗教学思想の展開を内在的に検討し、これを、先知主義的な宗教理解——社会を表わす象徴体系として宗教をとらえる——から、主意主義的な宗教理解——社会を作り直すメカニズムを宗教のなかに見出す——への移行として提示した。デ

ュルケームによる宗教理解の、このように根本的な構造転換には、とりわけ一八九七年出版の『自殺論』から一九二二年の『宗教生活の基本形態』にいたるまで、あしかけ一五年間におよぶデュルケームの思想展開——一言でいえば「社会学的自然主義」から「社会学的理想主義」への道行き——が大きく作用している。

しかし一方でこの時期は、周知のように、彼がボルドー大学からソルボンヌに移り（一九〇二年）、フランスのアカデミスムのなかで中心的役割を果たすようになると同時に、『社会学年報』(Année sociologique)を創刊し（一八九八年）、若手の研究者を糾合して、フランス社会学派あるいは社会学年報学派等と称される<sup>2)</sup>一大勢力を築いていく時期とも重なっていた。この社会学年報学派の活動のなかでは、あとで詳しく見るように、宗教研究がひとつの中核をなして、『宗教生活の基本形態』にいたるデュルケームの思想展開にも大きく関連していたと考えられる。私の著書ではこの点に関してわずかしか触れることができなかったが、社会学年報学派総体の宗教学思想の検討が、デュルケームの宗教学思想を考察する上でも重要な布石となることは言うまでもない。

小論では、手始めに社会学年報学派内部で宗教研究がどのように位置づけられていたのかを確認し、さらに『社会学年報』宗教社会学セクションの構成の変遷をたどるなかで、学派に共通する宗教研究の枠組みを素描してみた。もとよりここで明らかとなる枠組みはあくまで形式的なものにすぎないが、その内実を埋め、社会学年報学派の宗教学思想の実質的な全体像を探っていくことが、私の今後の課題となるのである。その作業はまた、デュルケーム宗教学思想の再考という目標に向けられるものであると同時に、近代宗教学思想の再検討という、より大きな問題設定にも通底していくはずである。というのも、これまた周知のごとく、社会学年報学派の宗教研究がテーマとしたのは、聖観念、供犠、呪術、死者儀礼、祈禱、マナイスムやトーテミスム、さらには社会構造と宗教現象との関連等々、近代宗教学の成立を考える上で避けては通れないトピックスばかりだったからである。社会学年報学派の宗教学思想を入念に読み解いていくなかで、これらのトピックスの意味をも改めて考え直してみたいというのが、私のささやかな希望なのである。

### 一 社会学年報学派における宗教研究の位置づけ

『社会学年報』は一八九八年の創刊以来、当初は毎年、一九〇七年の第一〇巻以降は三年毎に公刊されるが、一九一三年の第二二巻を最後に途絶し、第一次世界大戦の混乱のさなか、一九一七年のデュルケームの死も相俟って、

表1 『社会学年報』の構成（第2巻以降）

- 1°Partie: memoires originaux  
2°Partie: analyses et notices bibliographiques  
1°section-Sociologie générale  
2°section-Sociologie religieuse  
3°section-Sociologie morale et juridique  
4°section-Sociologie criminelle  
5°section-Sociologie économique  
6°section-Morphologie sociale  
7°section-Divers

学派としての活動は一応の終焉を迎える。戦後、一九二五年になって『社会学年報』はモリスを中心に復刊され——復刊第一巻にモリスの「贈与論」が掲載されている——、新たな活動が再開されたが、これも第二巻の第一分冊を出した後、休刊に追い込まれることになる。ここでは通例に倣って、また近代宗教学へのインパクトという点も勘案して、議論の対象を、第一次世界大戦までの『社会学年報』をめぐる動きに限定しておく。

まず、『社会学年報』という雑誌の性格を簡単に押さえておきたい。『社会学年報』は、通例、二、三編の論文が収録された第一部と、アナリイズ（文献解題）の第二部から構成されている（表1『社会学年報』の構成）を参照）。当時のフランスでは、一八七〇年代末から、様々な学問分野で『年報』の創刊が続いており、二部構成の体裁そのものも『社会学年報』のオリジナルではない。田原音和によれば、その直接の原型は、アルフレッド・ビネが一八九五年に創刊した『心理学年報』に求められる<sup>3)</sup>。ただ、すでに近代的学問として対象領域が確定されていた心理学とは異なって、未だ建設途上にあつた社会学ではその対象も未確定で、関連他学科から研究素材を貪欲に吸収する必要があつた。したがって『社会学年報』の場合、第一部の論文よりもむしろ、社会学の研究素材となり得る多様な文献（歴史、宗教、習俗、道徳、法律、犯罪、経済、地理、言語等の領域）をカバーする第二部の方が、分量的にも大部分を占め、重視されたのである<sup>4)</sup>。

『社会学年報』のアナリイズには、単なる書名の紹介のものも含まれるが、その大半は、時には数頁にもおよぶことのある書評によって占められている。これら多様な文献を整理する項目の立て方は、あるべき社会学の方向性を規定する枠組みとして重要な意味を担っていた。表1に見るように、その大枠は一貫して、一般社会学、宗教学、宗教学、道徳および法社会学、犯罪社会学、経済社会学、社会形態学（第二巻以降）、その他、の七つのセクシ

ヨンに分けられていたが、各セクションの下位区分は、年々変貌を遂げ、拡充されていった。もちろん、そこにはデュルケームの強い指導力が働いていたと思われるが、しかしながらそれは同時に、総計四七名にのぼる『社会学年報』の執筆者——社会学年報学派の構成メンバー——による共同作業によって生み出され、共有された枠組みであったと見ることも可能である。

社会学年報学派のメンバー構成、あるいは研究集団としての構造に関する研究は、一九七〇年代後半から八〇年代にかけて、たとえばヤッシュ・ナンダン<sup>6)</sup>やフィリップ・ベナル<sup>7)</sup>、日本では田原音和<sup>8)</sup>、内藤莞爾<sup>9)</sup>らによって推し進められ、社会学年報学派が、従来考えられていたほど強固に組織された一枚岩の学派ではなく、メンバーの自主性が尊重されたゆるやかな研究者集団であったとする見解が、現在では通説となつていっている。したがって、彼らの共同作業にはある種の統一性と同時に様々な葛藤も孕まれていたと考えられるのであり、そのような相剋をも含めて、その全体像が解明されねばならないのであるが、ここではさしあたって、学派に共通する枠組みが存在し、しかもそれが『社会学年報』自体の構成に体现されていたことを確認するだけで十分である。そしてこの点を、宗教社会学セクションにおいて具体的に検討することが、小論の目的となるのである。

ところで、『社会学年報』において宗教社会学セクションは、一貫して重要な位置を占めていた。まず、表1に見られるように、アナリズ全体の構成のなかで、それは常に一般社会学の次、個別社会学の筆頭に位置づけられていた。この点に関しては、『社会学年報』第二巻序文のデュルケームの言葉を引いておかねばならない。

これらの文献解題の冒頭には、今年も昨年と同様、宗教社会学に関わるものが見出されるだろう。われわれがこのように、この種の現象に与えた一種の優位性に驚かれる向きもあるだろう。しかしそれは、これらの現象が、他のすべての現象——あるいは少なくとも他のほとんどすべての現象——が由来する胚珠だからである。宗教は当初から、みずからうちに、混乱した状態ではあったが、すべての要素を含んでいた。それらの要素は相互に、さまざまな様式で分離しあい、決定しあい、結合

しあいながら、集合生活の多様な発現を生み出したのである。科学と詩が生じたのは、神話と伝説からである。造形美術が生まれたのは、宗教的装飾と崇拜の儀式からである。法と道徳は儀礼的諸実践から生じた。世界についての我々の表象、霊魂・不死性・生命に関するわれわれの哲学的諸概念は、その最初の形態であったところの、宗教的諸信念を知らずには理解できない。親族関係は、本質的に宗教的な絆であることから始まった。刑罰、契約、贈与、贖罪は、贖罪の供儀、契約の供儀、コミユニオンの供儀、顕彰の供儀等の変形である。……数多くの問題が、宗教社会学との関係が認識された日から、その様相を一変する<sup>11)</sup>。

ここには、宗教がすべての社会制度の「胚珠(germe)」であり、したがってこれを対象とする宗教社会学こそがすべての社会制度研究の基礎になるという歴史的ないしは発生論的視点を、とりあえずは指摘できるだろう。いいかえればこれは、社会学総体の発展のなかで宗教社会学が方法的に枢要な位置を占めるとする認識である。しかし、デュルケーム自身の思想展開においてもこの発生論的視点は徐々に後退するのみならず、『社会学年報』における宗教社会学セクションの構成自体も、このような発生論的方法とは無関係に、独自の展開を遂げていくことになる。ただ、その展開を追っていく前に、社会学年報学派のメンバー構成という別の側面からも、宗教社会学の優位性を裏付けておきたい。

次頁の表2『社会学年報』宗教社会学関連項目等一覧』は、『社会学年報』全巻に掲載された、宗教研究関連の論文ならびに、宗教社会学セクションの構成と担当者とを、各巻の目次から抜粋して一覧表にしたものである。ここでは、とくに宗教研究を担う中心メンバーであったアンリ・ユベール(一八七二—一九二七)、マルセル・モース(一八七二—一九五〇)、ロベール・エルトツ(一八八一—一九一五)に、デュルケーム(一八五八—一九一七)を加えた四人を色分けして示してある。これを見れば一目瞭然であるが、宗教社会学セクションは、一貫してモースとユベールが担当し、第九巻(一九〇六年)から、エルトツが加わるようになる。デュルケームはもっぱら道徳社会学と社会形態学のセクションを担当して、宗教社会学セクションへの関与

- 8(1905)  
 "Sur l'organisation matrimoniale des sociétés australiennes", par M.Durkheim pp.118-148  
 II<sup>e</sup>Section-Sociologie religieuse, par MM.Hubert et Mauss pp.223-371
- 1.Philosophie religieuse, conceptions générales
  - 2.Systèmes religieux: A.-Religions des sociétés inférieures / B.-Religions nationales / C.-Religions universalistes
  - 3.Systèmes religieux des groupes secondaires
  - 4.Cultes spéciaux
  - 5.Croyances et pratiques dites populaires
  - 6.La magie
  - 7.Croyances et rites concernant les morts
  - 8.Le rituel: A.-Le calendrier religieux et les fêtes / B.-Cérémonies complètes et rites manuels / C.-Rites oraux
  - 9.Représentations religieuses: A.-Représentations religieuses d'êtres et de phénomènes naturels / B.-Représentations des êtres spirituels / C.-Les mythes / D.-Légendes, contes, épopées / E.-Dogmes
  - 10.Objets et lieux de culte
  - 11.Les sociétés religieuses, leur morale et leur organisation
- 9(1906)  
 "Essai sur les variations saisonnières des sociétés Eskimos: Étude de morphologie sociale", par M.Mauss (avec H.Beuchet) pp.39-132  
 II<sup>e</sup>Section-Sociologie religieuse pp.169-322
- 1.Philosophie religieuse. Conceptions générales, par MM.Hubert et Mauss
  - 2.Systèmes religieux: A.-Religions des sociétés inférieures, par MM.Hertz, Hubert et Mauss / B.-Religions nationales, par M.Hubert / C.-Religions universalistes, par MM.Hertz et Hubert
  - 3.Systèmes religieux des groupes secondaires (Les sectes)
  - 4.Cultes spéciaux, par M.Hubert
  - 5.Croyances et pratiques dites populaires, par M.Hubert
  - 6.La magie, par M.Hubert
  - 7.Croyances et rites concernant les morts, par M.Hubert
  - 8.Le rituel, par MM.Hubert et Mauss: A.-Le calendrier religieux et les fêtes / B.-Cérémonies complètes et rites manuels / C.-Mécanisme rituels divers / D.-Rites oraux / E.-Objets de culte, par M.Mauss
  - 9.Représentations religieuses, par MM.Hubert et Mauss: A.-Représentations religieuses d'êtres et de phénomènes naturels / B.-Représentations des êtres spirituels / C.-Les mythes / D.-Légendes, contes, épopées / E.-Dogmes / F.-Les livres sacrés
  - 10.Les sociétés religieuses, leur morale et leur organisation, par MM.De Felice et Hubert
- 10(1907)  
 "Contribution à une étude sur la représentation collective de la mort", par M.R.Hertz pp.48-137  
 II<sup>e</sup>Section-Sociologie religieuse pp.204-351
- 1.Philosophie religieuse, conceptions générales, par MM.Hubert et Mauss
  - 2.Systèmes religieux: A.-Religions des sociétés inférieures, par M.Mauss / B.-Religions nationales, par M.Mauss / C.-Religions universalistes, par M.De Felice
  - 3.Systèmes religieux des groupes secondaires, les sectes, etc. par M.Mauss
  - 4.Cultes spéciaux, par M.Mauss
  - 5.Croyances et pratiques dites populaires, par M.Hubert
  - 6.La magie, par MM.Hubert, Mauss et Bianconi
  - 7.Croyances et rites concernant les morts, par M.Hubert
  - 8.Le rituel: A.-Le calendrier religieux et les fêtes, par M.Mauss / B.-Cérémonies complètes et rites manuels, par MM.Hubert et Mauss / C.-Mécanisme rituels divers, par MM.Hubert et Mauss et De Felice / D.-Rites oraux / E.-Objets et lieux de cultes, par M.Mauss
  - 9.Représentations religieuses: A.-Représentations religieuses d'êtres et de phénomènes naturels, par MM.Hubert et Mauss / B.-Représentations des êtres spirituels, par M.Mauss / C.-Les mythes, par MM.Hertz, Hubert, Mauss / D.-Légendes, contes, épopées, par MM.Hubert et Beuchet / E.-Dogmes / F.-Les livres sacrés
  - 10.Les sociétés religieuses, leur morale et leur organisation, par MM.De Felice, Hubert et Mauss
- 11(1910)  
 II<sup>e</sup>Section-Sociologie religieuse pp. 53-268
- 1.Traits généraux, philosophie religieuse, par MM.Mauss et David
  - 2.Systèmes religieux des sociétés inférieures: A.-Le système totémique, par MM.Durkheim et Mauss / B.-Systèmes religieux à totémisme évolué, par M.Mauss / C.-Systèmes religieux tribaux, par M.Mauss
  - 3.Systèmes religieux nationaux, par MM.Hertz, De Felice et Hubert
  - 4.Systèmes religieux universalistes, par MM.Hertz et De Felice
  - 5.Systèmes religieux des groupes secondaires, sectes, par MM.Hubert et De Felice
  - 6.Cultes spéciaux, par M.Mauss
  - 7.Croyances et pratiques dites populaires, par M.Reynier
  - 8.Croyances et rites concernant les morts, par M.Hubert
  - 9.La magie, par MM.Mauss, Hubert et Hertz
  - 10.Rituel, par MM.Mauss, Hubert et Hertz: A.-Les calendriers religieux et les fêtes / B.-Cérémonies complètes et rites manuels / C.-Mécanisme rituels divers / D.-Rituel oral
  - 11.Objets et lieux de culte
  - 12.Représentations religieuses, par MM.Mauss, Bianconi et Hubert: A.-Représentations religieuses d'êtres et de phénomènes naturels / B.-Représentations d'êtres spirituels / C.-Les mythes / D.-Légendes, contes, épopées / E.-Dogmes
  - 13.Les sociétés religieuses, leur droit et leur morale, par MM.R.Hertz et H.Hubert
- 12(1913)  
 II<sup>e</sup>Section-Sociologie religieuse pp. 75-321
- 1.Traits généraux.- Philosophie religieuse, par MM.Mauss, Durkheim, Hubert et Davy
  - 2.Systèmes religieux des sociétés inférieures: A.-Le système totémique, par MM.Durkheim et Mauss / B.-Systèmes religieux à totémisme évolué, par MM.Mauss et Hertz / C.-Systèmes religieux tribaux, par MM.Mauss et Bianconi / D.-Système religieux primitifs décomposés, par M.Mauss
  - 3.Systèmes religieux nationaux, par MM.Hubert, Reynier, Marx
  - 4.Systèmes religieux universalistes, par MM.Doutte et M.David
  - 5.Systèmes religieux des groupes secondaires, sectes, par M.Hertz
  - 6.Cultes spéciaux, par M.Hubert
  - 7.Croyances et pratiques dites populaires, par MM.Hubert et Marx
  - 8.Croyances et rites concernant les morts, par MM.Mauss et Roussel
  - 9.La magie, par M.Mauss
  - 10.Rituel, par MM.Hubert, Mauss, Jeanmaire, Marx, Reynier et Fauconnet: A.-Les calendriers religieux et les fêtes / B.-Rites positifs. Cérémonies complètes et rites manuels / C.-Rites positifs (suite). Mécanisme rituels divers / D.-Rites négatifs / E.-Rites oraux
  - 11.Objets et lieux de culte, par MM.Mauss, Marx, Reynier et Hubert
  - 12.Représentations religieuses: A.-Représentations religieuses d'êtres et de phénomènes naturels, par MM.David, Hubert, Hertz, Mauss et Marx / B.-Représentations d'êtres spirituels, par MM.Hertz, Hubert, Reynier/ C.-Les mythes, par MM.Mauss et Hubert / D.-Légendes et contes, par MM.Mauss et Marx / E.-Dogmes, par MM.Mauss, Hertz, Doutté, Fauconnet
  - 13.Les sociétés religieuses, leur droit et leur morale, par MM.Mauss, Hertz, De Felice, Hubert

## 表2 『社会学年報』 宗教社会学関連項目等一覽

- E.Durkheim (1858.4.15-1917.11.15), M.Mauss (1872.7.10-1950.2.10), H.Hubert (1872.6.23-1927.3.25), R.Hertz (1881.6.21-1915.4.13)
- 1(1898)  
 "La prohibition de l'inceste et ses origines", par E.Durkheim pp.1-70  
 II<sup>e</sup>Section-Sociologie religieuse pp.160-269
- 1.Traité généraux, philosophie, méthode (par M.Mauss)
  - 2.Religions primitives en général (par M.Mauss)
  - 3.Culte domestique (par M.Mauss)
  - 4.Croyances et pratiques concernant les morts (par M.Mauss)
  - 5.Cultes populaires en général, plus particulièrement agraires (par M.Mauss)
  - 6.Le rituel (par M.Mauss)
  - 7.Mythes (par MM.Mauss et Hubert)
  - 8.Organisation du culte, monachisme
- Notices diverses sur les grandes religions en général
- 2(1899)  
 "De la définition des phénomènes religieux", par M.E.Durkheim pp.1-28  
 "Essai sur la nature et la fonction du sacrifice", par MM.H.Hubert et Marcel Mauss pp.29-137  
 II<sup>e</sup>Section-Sociologie religieuse pp.187-287
- 1.Traité généraux, méthode (par M.Mauss)
  - 2.Religions primitives en général (par M.Mauss)
  - 3.Magie, sorcellerie et superstitions populaires (par MM.Mauss et Hubert)
  - 4.Croyances et rites relatifs aux morts (par MM.Hubert et Mauss)
  - 5.Cultes en général, plus spécialement agraires (par MM.Durkheim, Hubert et Mauss)
  - 6.Mythes, légendes, croyances populaires (par MM.Mauss et Hubert): A.-Les mythes / B.-Légendes, croyances populaires
  - 7.Le rituel (sacrifice, prières, mystères, etc.) (par MM.Mauss et Hubert)
  - 8.Les institutions monacales et ascétiques (par MM.Mauss et Hubert)
  - 9.Études diverses sur les grandes religions (par MM.Mauss, Levy et Hubert)
- 3(1900)  
 II<sup>e</sup>Section-Sociologie religieuse (par MM.Hubert et Mauss) pp.203-316
- 1.Traité généraux, méthode
  - 2.Phénomènes religieux élémentaires: A.-Religions primitives en général / B.-Magie / C.-Superstitions populaires
  - 3.Croyances et rites relatifs aux morts
  - 4.Cultes en général, plus spécialement agraires
  - 5.Traditions et croyances: A.-Mythes / B.-Légendes et contes / C.-Dogmes
  - 6.Rituel
  - 7.Études diverses sur les grandes religions
- 4(1901)  
 "Deux lois de l'évolution pénal", par M.Durkheim pp.65-95  
 II<sup>e</sup>Section-Sociologie religieuse, par MM.H.Hubert et M.Mauss pp.156-304
- 1.Conceptions générales
  - 2.Phénomènes religieux élémentaires: A.-Religions primitives / B.-Superstitions populaires
  - 3.La magie
  - 4.Croyances et rites relatifs aux morts
  - 5.Les sociétés religieuses et leur organisation
  - 6.Le rituel: A.-Cérémonies. Rites manuels / B.-Rites verbaux (La prière, le charme) / C.-Les fêtes; le Calendrier religieux
  - 7.Les représentations religieuses: A.-La conception des Dieux et des autres êtres religieux (1.Les dieux / 2.Les saints / 3.Les démons) / B.-Mythes, légendes, contes / C.-Dogmes
  - 8.Études diverses sur les grandes religions
- 5(1902)  
 "Sur le totémisme", par M.Durkheim pp.82-122  
 II<sup>e</sup>Section-Sociologie religieuse, par MM.H.Hubert et M.Mauss pp.189-319
- 1.Conceptions générales, méthodologie: A.-L'évolution religieuse en général / B.-La religion et les sentiments religieux de l'individu / C.-Méthodologie
  - 2.Formes élémentaires de la vie religieuse: A.-Religions primitives / B.-Croyances et pratiques populaires inorganisées
  - 3.La magie
  - 4.Croyances et rites concernant les morts
  - 5.Le rituel: A.-Le calendrier, l'année liturgique / B.-Cérémonies complètes, rites manuels / C.-Lieux de culte
  - 6.Représentations religieuses: A.-Représentations religieuses d'êtres ou de phénomènes naturels / B.-Représentations des êtres religieux (esprits, dieux, saints, démons) / C.-Les mythes / D.-Contes / E.-Les dogmes
  - 7.La société religieuse
  - 8.Études d'ensemble sur les grandes religions
- 6(1903)  
 "De quelques formes primitives de classification: Contribution à l'étude des représentations collectives", par MM.E.Durkheim et M.Mauss pp.1-72  
 II<sup>e</sup>Section-Sociologie religieuse, par MM.H.Hubert et M.Mauss pp.166-294
- 1.Conceptions générales et méthodologie
  - 2.Formes élémentaires de la vie religieuse: A.-Religions primitives / B.-Croyances et pratiques populaires inorganisées
  - 3.La magie
  - 4.Croyances et rites concernant les morts
  - 5.Le rituel: A.-Le calendrier religieux, les fêtes / B.-Cérémonies complètes, rites manuels / C.-Rites oraux / D.-Objets et lieux de culte
  - 6.Représentations religieuses: A.-Représentations religieuses d'êtres et de phénomènes naturels / B.-Représentations des êtres religieux / C.-Les mythes / D.-Légendes et contes / E.-Dogmes
  - 7.La société religieuse
  - 8.Études d'ensemble sur les grandes religions
- 7(1904)  
 "Esquisse d'une théorie général de la magie", par MM.H.Hubert et M.Mauss pp.1-146  
 II<sup>e</sup>Section-Sociologie religieuse, par MM.H.Hubert et M.Mauss pp.199-370
- 1.Philosophie religieuse, conceptions générales
  - 2.Systèmes religieux généraux: A.-Religions des sociétés inférieures / B.-Religion ethniques et universalistes
  - 3.Systèmes religieux des groupes secondaires (Clans, familles, sociétés secrètes, etc.)
  - 4.Croyances et pratiques populaires inorganisées
  - 5.La magie
  - 6.Croyances et rites concernant les morts
  - 7.Le rituel: A.-Le calendrier religieux, les fêtes / B.-Cérémonies complètes, rites manuels / C.-Rites oraux
  - 8.Représentations religieuses: A.-Représentations religieuses d'êtres et de phénomènes naturels / B.-Représentations des êtres religieux / C.-Les mythes / D.-Légendes et contes / E.-Dogmes
  - 9.Les sociétés religieuses et leur organisation

表3 社会学年報学派による宗教学研究関連の著作

1898	デュルケーム	「個人表象と集合表象」
	デュルケーム	「個人主義と知識人」
	デュルケーム	「近親婚の禁止とその起源」 AS 1
1899	デュルケーム	「宗教現象の定義について」 AS 2
	ユベール、モース	「供犠の本質と機能に関する試論」 AS 2
1901	デュルケーム	「刑法進化の二法則」 AS 4
1902	デュルケーム	「トーテミズムについて」 AS 5
1903	デュルケーム、モース	「分類の若干の原始的形態について——集合表象研究試論」 AS 6
1904	ユベール、モース	「呪術の一般理論素描」 AS 7
	モース	「オーストラリア社会における呪術的力の起源」
1905	ユベール	「シャントピー・ド・ラ・ソーセー『宗教史教本』仏訳への序論」
	デュルケーム	「オーストラリア社会の婚姻組織について」 AS 8
	ユベール	「宗教と呪術における時間の表象についての梗概的研究」
1906	デュルケーム	「道徳的事実の決定」
	モース、ブーシャ	「エスキモー社会の季節的変動に関する試論——社会形態学研究」 AS 9
1907	デュルケーム	「公開講義：宗教——諸起源」
	エルツ	「死の集合表象に関する研究試論」 AS 10
1908	ユベール、モース	「若干の宗教現象の分析への序論」
1909	デュルケーム	「社会学と認識の理論」
	デュルケーム	「宗教的思考の起源に関する古典的体系の批判的検討」
	ユベール、モース	『宗教史論集』
	モース	『祈禱 第一部 諸起源』
	エルツ	「右手の優越——宗教的極性に関する研究」
1911	デュルケーム	「価値判断と実在判断」
1912	デュルケーム	『宗教生活の基本形態——オーストラリアにおけるトーテム体系』
1913	デュルケーム	「人間本性の二元性と宗教の問題」
	エルツ	「聖ベス——アルプス地方の崇拜の研究」
1914	デュルケーム	「人間本性の二元性と社会的条件」
1919	デュルケーム	「宗教の社会的概念」
1920	デュルケーム	「道徳論への序論」
1922	エルツ	「原始社会における罪と贖罪」
1928	エルツ	『宗教社会学・民俗学論集』

\*AS = 『社会学年報』

はごく限られた範囲に止まっている。しかしこの時期の彼の論文や講義内容から判断するかぎり(表3)「社会学年報学派による宗教学研究関連の著作」を参照、宗教への関心を強く持続しながら、『宗教生活の基本形態』刊行のために着々と準備を進めていたと見ることができるといえる。

ちなみに第一巻から第一〇巻までの『社会学年報』に掲載された論文は全部で二二編あるが、そのうちの半数近くを占める一〇編がこの四人によって執筆され、その大半は宗教に関連するものであった(表2ならびに表3を参照)。さらにベナルの研究<sup>13)</sup>によれば、『社会学年報』全巻に掲載された二五行以上の書評二〇九七編のうち、デュルケームが三三〇編、モースが三二六編、ユベールが二七二編と、上位三位までを独占している。これにエルツによる書評二〇編を加えると、合計九四八編となり、全体の書評数の、実に四五%に上る。これらの書評は宗教社会学セクション以外のものも含み、また単なる量的な指標にすぎないとは言え、デュルケームはもちろんのこと、モースとユベールもまた社会学年報学派の中核メンバーに位置し、彼らが担当する宗教社会学セクションが、『社会学年報』が目指すべき方向性の一翼を強力に担っていたことは疑いを容れない。

このように、宗教学研究は、社会学年報学派の活動において中核的な位置を占めており、またその成果が、人類学を中心とした宗教学研究、儀礼研究に計り知れない影響を与え続けてきたことも周知の通りである<sup>15)</sup>。しかし、デュルケームやモースといった、影響力の大きな思想家の個性が強調されるあまり、その背景にあつたはずの緊密な共同作業や、あるいは社会学年報学派としての宗教学研究の全体像が顧みられることは、これまであまりなかったように思われる<sup>16)</sup>。少数の例外としてはたとえば、最近、竹沢尚一郎が、おそらくフランクソワール・アンドレ・イザンベールの議論もふまえて、デュルケームにおける聖観念の展開に、ユベールとモースによる「供犠の本質と機能に関する試論」(二八九八年)ならびに「呪術の一般理論素描」(一九〇四年)が決定的な影響を与えたと指摘している<sup>17)</sup>。たしかに、「供犠」論文における聖俗転換の動態的な視角と、「呪術」論文における非人格的な呪術・宗教的力Ⅱマナの觀念が、デュルケームの聖観念にも必須の構成要素であることは否定できない。けれどもそれがユベールとモースからデュルケームへの一方的な影響関係によるものと言いつけるかどうかは、議論の余地がある<sup>18)</sup>。いずれにせよ、『社会学年報』を中心に展開される彼らの宗教学研究の全体像を、その相互的な影響の具体的様相を確認しながら周到に構築していく必要があると思われるのである<sup>19)</sup>。

もちろん、社会学年報学派の宗教学思想の全体的な把握は、基本的には、デュルケーム、ユベール、モース、エルツラによる個々の著作の具体的内容を詳細に吟味し比較するなかでなしとげられるべきものだろうが、ここでは、その前段階のいわば外堀を埋める試みとして、『社会学年報』の宗教学セクションの構成の変遷を簡単にたどっておきたい。それは、形式面から社会学年報学派の宗教学思想の全体像を探り、今後の作業のための見取り図を示す試みともいえるだろう<sup>20</sup>。

## 二 宗教学セクションの構成の変遷

次頁の表4「宗教学セクションの構成の変遷」は、先の表2『社会学年報』宗教学関連項目等一覧」のなかから、宗教学セクションの項目だけを取り出して日本語に移し替え、一覧表にしたものである。これを参照しながら以下の記述を読んで頂きたい。

まず、このような宗教学セクションの構成の出発点は、一八九七年六月、デュルケームがモースに宛てた書簡に、その原型を見出すことができる。このなかでデュルケームは、モースから送られてきたアナリズのための文献リストに対して、「原始民族」や民俗学関連の文献が欠落し、社会学的观点が稀薄であるとして、かなり手厳しい言葉で不満をあらわにし、項目立てに関するみずからの試案を示すのである。そこでは、「総論」、「供犠」、「消極的祭祀」、「祈禱」、「神話」、「埋葬儀礼」、「原始的祭祀」、「原始的信念」といった主要項目が示され、さらに「死者に関わる信念と儀礼」、「家庭祭祀(culte domestique)」も項目の候補として提示されていた<sup>21</sup>。

おそらくは、このようなデュルケームの指示を受けて、モースが構想したのが第一巻の構成である。表4を見ても分かるように、それはきわめてシンプルであるが、なかでも、「原始宗教」と「民間崇拜(cultes populaires)」（いわゆる「民間信仰」を指す）への着目、「死者に関わる信念と実践」、宗教的行為としての儀礼と宗教的思考としての神話の二分法、社会集団としての祭祀組織といった項目立てのアウトラインは、基本的に後の各巻の構成に受け継がれていくものといえる。

ただ第四巻までは、それぞれの項目の配列や名称、さらには小項目の立て

方に関してかなりの異動が見られる。たとえば「家庭祭祀」の項目は第二巻以降、また「農耕に関わる崇拜」の文言は第四巻以降、姿を消し<sup>22</sup>、「原始宗教」と「民間の俗信」等から構成される「基本的な宗教現象」の項目が第三巻から登場する。第二巻に初めて姿を現わす「呪術」は、独立の項目として扱われたり、「基本的な宗教現象」に組み込まれたり、なかなか所在が確定しない。第四巻では、それ以前から取り上げられていた「神話」、「伝説」、「物語」、「教義」に、「神々と諸他の宗教的存在の概念」が付加されて、「宗教的表象」の項目が新設される。同じく第四巻から、「儀礼」の項目も「身体儀礼(rites manuels)」、「口誦儀礼(rites verbaux)」、「祭、宗教暦」の小項目に細分されていく。このようにめまぐるしい項目の移り変わりは、宗教現象を分類する枠組み創出のための試行錯誤の現われと見ることもできる。これに関連して触れておかねばならないのは、のちにモースが述懐する、『社会学年報』の性格の変化である。

年報はデュルケームによって創設されたのであるが、それは、われわれと彼が、すべての種類の社会学的主題に関するわれわれの視点を体系的に表明できるようにするためであった。しかしそれは、われわれの考えるところでは、急速に、方法のためのプロバガンダとはまったく別物となり、経済学者、宗教史家、法理論家などの多様な学派への異議申し立てとも別物となった。デュルケームの指導のもと、あえて言えば、その後押しも少しはあずかつて、われわれは一致団結して、単に観念のみならず、むしろ事実を組織しようとしたのである。第二巻以降、年報は、多様な特殊社会学の、十分に手を入れて更新された一種の総覧となった<sup>23</sup>。  
(傍点の強調は引用者による)。

モースが明示しているわけではないが、ここでいう「方法のためのプロバガンダ」の「方法」とは、前節で触れたデュルケームの発生論的方法のことを指していると考えられる。発生論的方法のプロバガンダとしての性格を前面に押し出しつつ、隣接学問からの社会学の独立を声高に主張する方向性から、いわば社会的事実に直接向き合って実質的な研究成果を蓄積していこう

表 4 宗教社会学セクションの構成の変遷

第1巻 (1898)	第2巻 (1899)	第3巻 (1900)	第4巻 (1901)
<p>1. 概説、哲学、方法 2. 原始宗教一般 3. 家庭祭祀 4. 死者に関わる信念と実践 5. 民間崇拜、特に農耕に関わる崇拜 6. 呪術 7. 神話 8. 祭祀組織、修道院制度 9. 大宗教一般に関する様々な紹介</p>	<p>1. 概説、方法 2. 原始宗教一般 3. 呪術、妖術と民間の俗信 4. 死者に関わる信念と儀礼 5. 崇拜一般、特に農耕に関わる崇拜 6. 神話、伝説、民間信念 7. 民間信念 8. 修道院と禁欲の制度 9. 大宗教に関する様々な研究</p>	<p>1. 概説、方法 2. 基本的な宗教現象 3. 民間の俗信 4. 死者に関わる信念と儀礼 5. 伝説と信念 6. 呪術 7. 神話 8. 祭祀組織、秘密結社等 9. 大宗教に関する様々な研究</p>	<p>1. 一般的概念 2. 基本的な宗教現象 3. 呪術、民間の俗信 4. 死者に関わる信念と儀礼 5. 宗教社会とその組織 6. 儀礼 7. 祭祀組織、身体儀礼 8. 口誦儀礼 (祈禱、呪文) 9. 祭、宗教暦 10. 宗教的表象 11. 神々と諸他の宗教的存在の概念 (1 神々、2 聖者、3 悪霊) 12. 神話、伝説、物語 13. 大宗教に関する様々な研究</p>
<p>第5巻 (1902)</p>	<p>第6巻 (1903)</p>	<p>第7巻 (1904)</p>	<p>第8巻 (1905)</p>
<p>1. 一般的概念、方法論 A. 宗教進化一般 B. 宗教と個人の宗教的感情 C. 方法論 2. 宗教生活の基本形態 A. 原始宗教 B. 組織化されていない民間の信念と実践 3. 呪術 4. 死者に関わる信念と儀礼 5. 儀礼 A. 曆、典札年 B. 儀式の全体、身体儀礼 C. 祭祀の場所 6. 宗教的表象 A. 自然的存在ないしは現象の宗教的表象 B. 宗教的存在の表象 (精霊、神々、聖者、悪霊) C. 神話 D. 物語 E. 教義 7. 宗教社会 8. 大宗教に関する全体的研究</p>	<p>1. 一般的概念と方法論 2. 宗教生活の基本形態 A. 原始宗教 B. 組織化されていない民間の信念と実践 3. 呪術 4. 死者に関わる信念と儀礼 5. 儀礼 A. 宗教暦、祭 B. 儀式の全体、身体儀礼 C. 口誦儀礼 D. 祭祀の対象と場所 6. 宗教的表象 A. 自然的存在および現象の宗教的表象 B. 宗教的存在の表象 C. 神話 D. 伝説と物語 E. 教義 7. 宗教社会 8. 大宗教に関する全体的研究</p>	<p>1. 宗教哲学、一般的概念 2. 一般的な宗教体系 A. 下級社会の宗教 B. 民族宗教 C. 普遍宗教 3. 民族的宗教体系 4. 普遍的宗教体系 5. 二次集団の宗教体系、セクト等 6. 特殊な崇拜 7. いわゆる民間の信念と実践 8. 呪術 9. 死者に関わる信念と儀礼 10. 儀礼 A. 宗教暦と祭 B. 儀式の全体と身体儀礼 C. 様々な儀礼の機制 D. 口誦儀礼 E. 祭祀の対象と場所 9. 宗教的表象 A. 自然的存在および現象の宗教的表象 B. 霊的存在の表象 C. 神話 D. 伝説、物語、叙事詩 E. 教義 F. 聖なる書物 10. 宗教社会、その道徳と組織</p>	<p>1. 宗教哲学、一般的概念 2. 宗教体系 A. 下級社会の宗教 B. 民族宗教 C. 普遍宗教 3. 二次集団の宗教体系 4. 特殊な崇拜 5. いわゆる民間の信念と実践 6. 呪術 7. 死者に関わる信念と儀礼 8. 儀礼 A. 宗教暦と祭 B. 儀式の全体と身体儀礼 C. 口誦儀礼 D. 祭祀の対象と場所 9. 宗教的表象 A. 自然的存在および現象の宗教的表象 B. 霊的存在の表象 C. 神話 D. 伝説、物語、叙事詩 E. 教義 10. 祭祀の対象と場所 11. 宗教社会、その道徳と組織</p>
<p>第9巻 (1906)</p>	<p>第10巻 (1907)</p>	<p>第11巻 (1910)</p>	<p>第12巻 (1913)</p>
<p>1. 宗教哲学、一般的概念 2. 宗教体系 A. 下級社会の宗教 B. 民族宗教 C. 普遍宗教 3. 二次集団の宗教体系 4. 特殊な崇拜 5. いわゆる民間の信念と実践 6. 呪術 7. 死者に関わる信念と儀礼 8. 儀礼 A. 宗教暦と祭 B. 儀式の全体と身体儀礼 C. 様々な儀礼の機制 D. 口誦儀礼 E. 祭祀の対象 9. 宗教的表象 A. 自然的存在および現象の宗教的表象 B. 霊的存在の表象 C. 神話 D. 伝説、物語、叙事詩 E. 教義 F. 聖なる書物 10. 宗教社会、その道徳と組織</p>	<p>1. 宗教哲学、一般的概念 2. 下級社会の宗教 A. トーテム体系 B. 民族宗教 C. 普遍的宗教体系 3. 民族的宗教体系 4. 普遍的宗教体系 5. 二次集団の宗教体系、セクト等 6. 特殊な崇拜 7. いわゆる民間の信念と実践 8. 呪術 9. 死者に関わる信念と儀礼 10. 儀礼 A. 宗教暦と祭 B. 儀式の全体と身体儀礼 C. 様々な儀礼の機制 D. 口誦儀礼 E. 祭祀の対象と場所 9. 宗教的表象 A. 自然的存在および現象の宗教的表象 B. 霊的存在の表象 C. 神話 D. 伝説、物語、叙事詩 E. 教義 F. 聖なる書物 10. 宗教社会、その道徳と組織</p>	<p>1. 概説、宗教哲学 2. 下級社会の宗教体系 A. トーテム体系 B. 進化したトーテムシステムに属する宗教体系 C. 部族的宗教体系 D. 崩壊した原始的宗教体系 3. 民族的宗教体系 4. 普遍的宗教体系 5. 二次集団の宗教体系、セクト 6. 特殊な崇拜 7. いわゆる民間の信念と実践 8. 死者に関わる信念と儀礼 9. 呪術 10. 儀礼 A. 宗教暦と祭 B. 儀式の全体と身体儀礼 C. 様々な儀礼の機制 D. 口誦儀礼 E. 祭祀の対象と場所 11. 宗教的表象 A. 自然的存在および現象の宗教的表象 B. 霊的存在の表象 C. 神話 D. 伝説、物語、叙事詩 E. 教義 13. 宗教社会、その法と道徳</p>	<p>1. 概説、宗教哲学 2. 下級社会の宗教体系 A. トーテム体系 B. 進化したトーテムシステムに属する宗教体系 C. 部族的宗教体系 D. 崩壊した原始的宗教体系 3. 民族的宗教体系 4. 普遍的宗教体系 5. 二次集団の宗教体系、セクト 6. 特殊な崇拜 7. いわゆる民間の信念と実践 8. 死者に関わる信念と儀礼 9. 呪術 10. 儀礼 A. 宗教暦と祭 B. 儀式の全体と身体儀礼 C. 様々な儀礼の機制 D. 口誦儀礼 E. 祭祀の対象と場所 11. 宗教的表象 A. 自然的存在および現象の宗教的表象 B. 霊的存在の表象 C. 神話 D. 伝説と物語 E. 教義 13. 宗教社会、その法と道徳</p>



とする方向性への転換があった、ということであろう。しかも控えめな表現ながら、モース自身がこの方向転換に深く関わっていたらしいことが示唆されているのも興味深い。こうした方向転換の帰結として、宗教社会学セクションでは、現実の多様な宗教現象を分類していく試みが、第二巻以降精力的に続けられていったと考えられるのである。そしてこのような模索の果てに、第五巻の宗教社会学セクションの序(introduction)<sup>21)</sup>において、ユベールとモースは次のように宣言することになる。

このセクションの構想は、ここまでのところで、われわれの研究の進展によって変わってしまった。われわれは今後の変更をみずからに禁ずるものではないが、より安定した方式に到達したと信じているので、いくつかの言葉を費やして、この方式の正当化に努めてみようと思う。

理想的な分類は、宗教現象の総体を以下の四つの項目のもとに配分するものとなるだろう。一、宗教的表象(representations religieuses)。ここには、宗教生活を支配する諸観念と、そこで練り上げられた諸観念、すなわち信念、神話、教義が配列されるだろう。二、宗教的实践(Pratiques religieuses)。すなわち、あらかじめ研究された諸観念ないしは諸信念によつて決定された、行為様式と行為の規則、多様な種類の身体儀礼ないしは口誦儀礼ならびにそれらを遂行するための諸条件。——これら最初の二つの項目の区別は、諸事実の、動作と表象への通常の分類に対応していると言えるだろう。三、宗教的組織(Organisation religieuse)。あるいは先行する場面において検討された観念ないしは実践がそこにおいて機能するところの、構成された諸集団の体制(位階制、教会、修道院、秘密結社など)……四、宗教体系(Systèmes religieux)。このセクションにおいてわれわれは、先の三つのカテゴリーに属する諸事実の自然的な集合、すなわち個別諸宗教、ないしは共通の本質的諸特性(トーテミスム、多神教など)を示している諸宗教の総体に取り組むのであり、それら双方の一般的な特質を決定するよう努めるであろう(傍点は原文のイタリックによる強調を示している)。

ここでユベールとモースは、宗教現象をとらえる上での四つの原理的なカテゴリー、すなわち表象Ⅱ信念、実践Ⅱ儀礼、社会組織、ならびにそれらを包摂する全体的な宗教体系の概念を提示している。いいかえれば、ここで表明されているのは、信念、実践、組織の三つの基本要素が一つのまとまりをなして体系を構成するものが宗教にはかならないとする発想であり<sup>22)</sup>、それは基本的な枠組みとしては、『宗教生活の基本形態』におけるあの有名な宗教の定義にも重なり合うといえる<sup>23)</sup>。さらにユベールとモースは、これら四つの原理的なカテゴリーに属さない、独立したカテゴリーとして、呪術、ならびに「死者に関わる信念と実践」を挙げている。

ただ、第五巻の時点では、これらのカテゴリーのなかでもとくに宗教体系という概念は、宗教社会学セクションの項目として明確には打ち出されなかった。ユベールとモースは、先の引用文に続けて次のように述べる。

諸事実と諸著作とは、この分類の明快さには、まだ適していない。それ故われわれは、これとは別に、宗教生活の基本形態(Formes élémentaires de la vie religieuse)と、この表題のもとで、トーテミスムのような宗教体系、いわゆる野蛮な諸民族の諸儀礼、諸信念、宗教的組織を研究するであろう。いわゆる文明諸民族の「民俗(folk-lore)」を構成する風化した諸事実の総体と同様に<sup>24)</sup>(傍点は原文のイタリックによる強調を示している)。

こうして、第三巻以降の「基本的な宗教現象」という項目を引き継ぐ形で、「宗教生活の基本形態」という呼称が採用されるのであるが、それは引用文にも明らかなように、「原始宗教」と断片的な「民間信仰」とを包摂するカテゴリーであった<sup>25)</sup>。第七巻になってようやく、「組織化されていない民間の信念と実践」が分離・独立し、「一般的な宗教体系」の項目が創設されるのだが、その遅延の理由としてユベールとモースは、「原始宗教」が民族誌家によつて体系としては十分に研究されてこなかったという点を挙げている<sup>26)</sup>。けれども、むしろキリスト教などの「普遍宗教」やユダヤ教などの「民族宗教」——いずれもそれまでは「大宗教(les grandes religions)」に関する様々な研究」の項目に一括されてきた——を、いわゆる「原始宗教」と同じカテゴリー

ーに含めることへの躊躇が働いていたのではないかと推測される。

それはともかく、第七巻以降、先ほどの四つの原理的カテゴリーを基軸として、名称に若干の変化はあるものの、「概説、宗教哲学」、「宗教体系」、「民間の信念と実践」、「死者に関わる信念と実践」、「呪術」、「儀礼」、「宗教的表象」、「宗教社会」という柱が固定され、社会学年報学派としての宗教理解の大枠が一応成立した、と見てよいだろう。四つの原理的カテゴリーに即していえば、これらの柱のなかでも「宗教体系」は、それが所属する社会類型との関連でいっそう多様化し、とくに第一巻以降設けられた「下級社会の宗教体系」の項目では、トーテミズムを基準とした類型化の試みが最後まで続くことになる。「儀礼」に関しては、宗教暦と祭、身体儀礼、口誦儀礼、儀礼の機制、消極的儀礼、「宗教的表象」については、自然現象の宗教的表象、神や精霊等霊的存在の表象、神話、伝説、教義がそれぞれ下位区分として設定される。とくに自然現象の宗教的表象は、分類体系等の認識社会的な問題にも結びつくジャンルであった。<sup>32)</sup>「宗教社会」に関しては、全巻を通じて詳細な分類の試みはほとんど見られない。あるいは、宗教社会がそのまま全体社会に合致するいわゆる「原始宗教」が学派の主たる関心の対象であったためだろうか。

### おわりに

以上、簡単に見てきたように、宗教社会学セクションの構成の変遷は、ユベールとモースを中心として、宗教研究の枠組みが形作られていく過程でもあった。もちろん、註で少し触れたように、そこには種々の見解の相違・葛藤、さらには視点の揺れなどが見出されるが、少なくとも宗教現象をとらえるカテゴリーの分類という点では、共通の枠組みが存在していた、と考えてよいだろう。だからこそ、先の表3「社会学年報学派による宗教研究関連の著作」に掲げられた著作のなかで、とくに宗教現象を直接の対象とする論考は、ほとんどこの枠組みのなかに位置付けてとらえることが可能となるのである(表5「宗教研究のカテゴリーと主要著作」を参照のこと)。あるいは逆に、そのような個別研究の進展に促されて、宗教現象をとらえる際の枠組みとしての項目立てが、徐々に自覚されていったと見た方がいいかもしな

い。そしてデュルケームの『宗教生活の基本形態』こそは、その副題「オーストラリアにおけるトーテム体系」が示しているとおり、それらの個別研究をふまえながら、オーストラリアのトーテミズムを素材として、一つの宗教体系を総体として描き出そうとするモノグラフだったのである。しかもそれは、個別具体的な宗教体系のモノグラフでありながら、宗教現象をとらえるカテゴリーをほとんどすべて網羅しつつ<sup>33)</sup>、宗生活一般の基本的な表出形態を描き出そうとする壮大な試みでもあった。

このように社会学年報学派の宗教学思想は、最終的に『宗教生活の基本形態』へと収斂していくと見ることも可能だろうし、実際、そのような説明にはかなりの説得力があるといえるだろう。しかしながらそれでは結局のところ、総帥デュルケームの強力な指導に付き従った高弟たちという、旧来の社会学年報学派像を打破することはできない。ユベール、モース、エルツらの宗教研究は、明らかにデュルケームのそれとは異なる独自性を持ち、だからこそそれに大きな影響を残し得たと考えられる。個々の論考の比較検討を通じて、

表5 宗教研究のカテゴリーと主要著作

概説、宗教哲学	デュルケーム「宗教現象の定義について」(1899) ユベール「シャントピー・ド・ラ・ソーセー『宗教史教本』仏訳への序論」(1904) ユベールとモース「若干の宗教現象の分析への序論」(1908)
宗教体系	デュルケーム「トーテミズムについて」(1902) デュルケーム『宗教生活の基本形態』(1912)
民間の信念と実践	エルツ「聖ベス」(1913)
死者に関わる信念と実践	エルツ「死の集合表象に関する研究試論」(1907)
呪術	ユベールとモース「呪術の一般理論素描」(1904) モース「オーストラリア社会における呪術的力の起源」(1904)
儀礼	ユベールとモース「供犠の本質と機能に関する試論」(1899) モース『祈禱』(1909)
宗教的表象	デュルケームとモース「分類の若干の原始的形態について」(1903) ユベール「宗教と呪術における時間の表象についての梗概的研究」(1905) エルツ「右手の優越」(1909)

彼らの共同作業の内実に幾分なりとも分け入り、彼らに共有される枠組みの形成過程を詳細に検討することにより、逆に彼らの宗教研究の独自性を浮き彫りにし、その理解をいっそう深めることができるだろう。あるいはいさゝか迂遠な道程となるかもしれないが、学派内に蓄積された豊穡な多様性を十分に汲み取りながら、いいかえれば、共通の根からいかにして多彩な果実が生み出されたのかを見届けながら、社会学年報学派の宗教学思想の全体像を描き出すこと、これが私の当面の課題となるのである。

#### 註

- (1) 山崎亮『デュルケム宗教学思想の研究』（未來社、二〇〇一年）
- (2) 私は、メンバーの共同作業の場としての『社会学年報』を重視する立場から、「社会学年報学派(*l'école de l'Année sociologique*)」の呼称を用いる。
- (3) 田原音和「デュルケム『学派』とは何か——『社会学年報』の創刊をめぐる——」(同『歴史のなかの社会学——デュルケムとデュルケミアン』[木鐸社、一九八三年]五一—五二頁)。
- (4) 第一一巻と第一二巻では論文はもはや掲載されず、アナリイズのみの構成となっている。
- (5) デュルケム自身、モースに宛てた書簡(一九九七年六月)のなかで次のように述べている。「宗教社会学を創造すべき素材を構成すること」が重要なことであり、取り上げるべき文献の「主要な選別は、出版された著作が、提出されるいは提出されるべき問題と維持している関係に従ってなされねばならない。……われわれ各自の仕事の最も重要な部分を構成するのは、諸著作をこのように分類することなのである」(E. Durkheim, *Letres à Mauss*, PUF, 1998, p.68)。あるいは一九〇〇年七月六日付のセレストアン・ブーグレ宛書簡では、「こうした分類の仕事こそが重要なのだ。それはまさしく社会学を体系づけることだからである。……これはおそろしく、この『年報』が後世に残すもの一つとなるだろう」(*Revue française de sociologie* xvii-2, 1976, p.176)と述べられている。

(6) Y.Nandan, *The Durkheimian School: A Systematic and Comprehensive*

*Bibliography*; Greenwood Press, 1977.

(7) P.Besnard, *La formation de l'équipe de l'Année sociologique, Revue française de sociologie* xx-1, 1979.

(8) 田原音和前掲書。

(9) 内藤莞爾『フランス社会学史研究——デュルケム学派とマルセル・モース』(恒星社厚生閣、一九八八年)。

(10) たとえばモースは、このような共同作業の意義を次のように強調している。「私を学派の仕事から切り離すことは不可能である……集団における共同作業の感覚、また協同が孤立に対抗する力であり、獨創性があると思いが上がった研究に対抗する力でもあるという確信、おそろしくここにこそ、昨日以上に今日の、私の学問的経歴を特徴づけるものがある」(M.Mauss, *L'oeuvre de Mauss par lui-même, Revue française de sociologie* xx-1, 1979, p.209.)これは、モースが一九三〇年頃に執筆した自身の知的履歴書ともいべき文献である)。しかしながらその共同作業は、デュルケムが総帥として君臨する上意下達的なものではなかった。「一八九三年から一九一四年までの二〇年間のフランスにおける社会学の進歩は、もしもわれわれが一つの作業集団でなかったならば、不可能だったろう。われわれは、一人の総帥、一人の哲学者の周りを囲む盲目的な弟子たちの単なる学派ではない。たしかにデュルケムは、広い射程を持ったアイデアに富んでいた。けれども、彼の周りにわれわれを集めたのは、彼が、その方法のきわめて確実であるところの、またその認識がきわめて広大かつ綿密に立証されているところの一人の学者であることを、われわれが知っていたからである。彼のデカルト主義、諸事実についての、常に現実的かつ合理的な探求、彼がそれらの事実を認識し見渡す際の力量、ここにこそ、私の心を最もよくとらえた、彼の精神の一面がある」(ibid., p.210)。

あるいはデュルケム自身も、ユベールとモースの共著論文「供儀の本質と機能に関する試論」(一八九九年)の作成に際して、様々な示唆をモースに書き送った書簡(一八九八年一月初旬)のなかで次のように記している。「私は外見上だけでも、統制を及ぼしたり、摂政のようにふるまったりしたくはない。だから、もしも私が何か役に立つとお前たち「モース

とユベール」が考えているのなら、私は何でもしよう。お前たちと協力することは、私にとって魅力となるだろう。しかし私は、お前たちに別格に扱ってもらいたくはなかった。実のところ、私はこのやり方が可能となるだろうし、双方にとって有益であると考えている。というのも、私はお前と同様、ユベールとも容易に分かり合えるはずだと思っっているからだ。少なくとも私は、すべての協力者にこのような印象を抱いてきたのであり、彼は、そのなかでも最も容易かつ最も完璧に協調できるであろう人間の一人である。しかし彼には、自分がまったく独立なのだということをよく感じ取ってほしい」(E. Durkheim, *Letres à Mauss*, p.100)。

モースやデュルケームのこれらの言葉には、『社会学年報』を舞台とした自由な共同作業の生産性に対する、楽観的といってもいい信頼感がにじみ出ている。もともとこれらの言葉は、公表を前提としていなかった私的な文書や書簡に記されているかぎりにおいて、彼らの本音がある程度ストレートに反映しているとは考えられるが、所詮は当事者による、いわば主観的な感想の表明にすぎない。彼らの共同作業が実際にどのような意義を担っていたのかは、それぞれの論考の比較検討を通じて改めて検討しなければならぬ問題といえる。

(11) E. Durkheim, Préface, *l'Année sociologique* (以下、ASと略記する)2, pp.IVf. / E. Durkheim, *Journal sociologique*, PUF, 1969, p.138.

(12) その詳細については、前掲拙著第四章「宗教研究への傾斜と新たな展開」を参照のこと。

(13) これら四人の他にも、レヴィ、ダヴィ、ピアンコニ、ド・フェリス、マルクス、ダヴィド、ルセル、レニエ、ジャンメール、フォコンネの名前も見えるが、ほとんどが第一〇巻以降の参加であり、また担当した書評の数もかなり少ない(cf. Besnard, op. cit., p.26)。後述するように、人類学を中心とした後世への影響という点でも、本文で取り上げた四人を、社会学年報学派による宗教研究の中心メンバーと位置付けることに異論はないだろう。

(14) Besnard, *ibid.* また、田原音和前掲書六六頁、内藤莞爾前掲書五頁以下をも参照のこと。

(15) たとえば田原音和は、「……『年報』は認識論的に独自の社会学(ある

いは社会学的読み方)を構築しうる手がかりを与えたことを意味する。『年報』全二巻のうちで、こうした認識論的転換で失敗した分野が多かったにもかかわらず、唯一と思われるほどの成果を示したのは宗教社会学の確立であったといえるのではないか」(田原前掲書、五三頁以下)と述べている。また後世への影響という点で、デュルケームの『宗教生活の基本形態』については、その影響範囲は多岐にわたり枚挙にいとまがないが、ユベールとモースによる「供儀の本質と機能に関する試論」(一八九九年)については、たとえば谷泰『聖書』世界の構成論理(岩波書店、一九八四年)やリユック・ド・ウーシユ『アフリカの供儀』(みすず書房、一九八八年)等を、またエルツによる「死の集合表象に関する研究試論」(一九〇七年)に関しては、ピーター・メトカーフ/リチャード・ハンティントン『死の儀礼——葬送習俗の人類学的研究 第二版』(未來社、一九九六年)等を参照のこと。

(16) 先にも触れたナンダンやベナルルらの研究も、社会学年報学派構成員の人間関係の形式的な分析に終始し、その共同作業の内実にはまったく言っていないほど踏み込んでいない。日本では、内藤莞爾が、とくにモースを中心として、ユベールやエルツの業績にも目を配りながら、その宗教研究の内実を丹念にたどろうとしているが、しかし社会学年報学派による宗教研究の全体像を提示するまでにはいたっていない(内藤莞爾前掲書、同『フランス社会学史研究——デュルケーム学派とマルセル・モース』[恒星社厚生閣、一九八八年]、同『デュルケームの社会学』[恒星社厚生閣、一九九三年])。また、欧米では近年、ユベール、モース、エルツそれぞれの思想に関する個別研究が進展を見せているが(cf. F. A. Isambert, Henri Hubert et la sociologie du temps, *Revue française de sociologie* xx-1, 1979; id., At the frontier of folklore and sociology: Hubert, Hertz and Czarnowski, founders of a sociology of folk religion, in P. Besnard (ed.), *The Sociological Domain*, Cambridge Univ. Pr., 1983; M. Fournier, Marcel Mauss, Fayard, 1994; R. Parkin, *The Dark Side of Humanity: The Work of Robert Hertz and its Legacy*, Harwood Academic Publishers, 1996, etc.)、しかしその場合に、個々の思想家の独自性を浮かび上がらせることに力点が置かれており、社

会学年報学派による宗教研究の全体像を提示するという発想はほとんど見出せない。

(17) 竹沢尚一郎『聖なるもの』の系譜学(同編『宗教とモダニティ』[世界思想社、二〇〇六年]所収)。cf. F.A. Isambert, L'élaboration de la notion de sacré dans l'«école» durkheimienne, *Archives de sciences sociales des Religions* 42-2, 1976.

(18) 註(10)でも触れたように、とりわけ「供犠の本質と機能に関する試論」の成立には、デュルケームによる示唆がかなりの程度、反映していたことが窺える(cf. E. Durkheim, *Lettres à Mauss*)。

(19) そのような必要性を浮き彫りにする典型例として、ここではイヴァン・ストレンスキーの論考「デュルケームのブルジョワ的供犠理論」(L. Strenski, Durkheim's Bourgeois Theory of Sacrifice, in N.J. Allen et al (eds.), *On Durkheim's Elementary Forms of Religious Life*, Routledge, 1998)を取り上げておく。

ストレンスキーのこの論考は、デュルケームの供犠理解が、ロバートソン・スミスの『セム族の宗教』(第二版、一八九四年)による影響を脱し、最終的にはユベール・モースの「供犠の本質と機能に関する試論」(一八九九年)の視点へと移行したと主張する。彼はこのような変遷を、当時のフランスにおけるカトリック的ないしはユダヤ教的なモダニズム勢力の伸張を背景としつつ、描き出そうとするのである。その際に、ユダヤ教的モダニストの典型例として引き合いに出されるのが、モースの師でもあったサンスクリット学者シルヴァン・レヴィであった。要するにモダニスト・レヴィの影響が、ユベールとモースを通じて間接的に、しかし決定的にデュルケームの供犠理解に作用した、とストレンスキーはとらえたのであった。

これはたしかに、大胆かつ刺激的な解釈であるが、仔細に見るならば、その論理展開にはかなりの危うさが潜んでいる。まずストレンスキーによれば、いけにえ(victime)の共食すなわちコミュニケーションに供犠の本質を求め、スミスの見解をデュルケームは当初採用していたのだが、この説では、いけにえそのものが予め神と同質の聖性を獲得していることが当然の前提とされていた。ところが『宗教生活の基本形態』においては、供犠の過程

でいけにえに聖なる特質が付与されるという、ユベール・モースの「供犠」論文と同じ見解が一箇所示されており(Durkheim, *Les formes élémentaires de la vie religieuse*, 1912, pp.481f.)、ストレンスキーはこの点にたくに注目するのである(Strenski, *ibid.*, p.120)。「宗教生活」でも「コミュニケーションを供犠の基本的要素の一つとする視点は存続している——したがってスミスへの賛同も少なくとも部分的には継続している——にもかかわらず、ストレンスキーはこの一事を以て、デュルケームがスミスのコミュニケーション説を放棄した、と見るのである。彼によればデュルケームの供犠理解は、ユベールとモースによる贈与説(gift theory of sacrifice)——いけにえを神への贈り物とみなす——、あるいは神々と人間との相互依存関係——神々は贈り物としてのいけにえに依存し、逆に人間は神々の恩恵によって生き永らえる——の提示へと移行したとされる。その上でストレンスキーは、「デュルケミアンたちは、コミュニケーションの幻想と、しばしばこれに結び付けられる利他主義的な無私無欲(altruistic selflessness)からは、まったくかけ離れている」(Strenski, *ibid.*, p.125)と述べ、デュルケームも含めて社会学年報学派による供犠の贈与説採用の背景に、個人によるギブ・アンド・テイクの関係をよくとするブルジョワ的個人主義・合理主義が伏在していた、と主張するのである。

社会学年報学派のブルジョワ的個人主義的性格という、いささか唐突なレッテル貼り自体は、勇み足のご愛敬と片付けてもよいが、ストレンスキーの立論には、デュルケームならびにユベールとモースによる供犠理解の解釈という点で、決して看過することのできない過誤が含まれている。実際のところ、『宗教生活』におけるデュルケームの供犠論はむしろ、スミスのコミュニケーション説とユベール・モースの贈与説——もつとも実際には単に贈与説とは言い切れない側面をも併せ持つが、ここではストレンスキーの用法に従っておく——とを総合したと見る方が妥当であるように、私には思われる。いずれにせよ、デュルケームの供犠理解と、それにまつわるロバートソン・スミス、ユベールとモースの供犠理解との関係には、多様な要因が絡まり合い、かなり複雑な様相を呈していることは否定できない(スミスとの関係に関しては、前掲拙著第四章「宗教研究への傾斜と新

たな展開」ならびに補論「ロバートソン・スミスによる『啓示』をめぐって」を参照のこと。ユベール・モースとの関連については稿を改めて論ずるつもりである。

ところが今しも見たように、ストレンスキーはきわめて強引に、デュルケームの供犠理解の、スミス説からユベール・モース説への移行を力説するのである。そればかりではない。彼はユベール・モース説の背後に、シルヴァン・レヴィの強い影響を見出す。すでに一八九二年の論文(Sylvain Lévi, *Science des religions et les religions de l'Inde, Bulletin de l'Ecole Pratique des Hautes Etudes*, 1892)においてレヴィは、宗教現象への社会的アプローチの必要性を説き、神々を生み出す供犠についての記述がヴェーダやブーファナに見られること、供犠が善悪いずれにも利用され得る両義性を帯びていること、神の背後に非人格的な聖なる力が存在することなどを指摘していた、とされる。さらにユベール・モースの「供犠」論文の成立に、レヴィの著書(S. Lévi, *La Doctrine du sacrifice dans les Brâhmanas*, 1899)が大きな影響を与えたというモースみずからの証言(M. Mauss, Sylvain Lévi, 1935, *M. Mauss, Œuvres* 3, Les Éditions de Minuit, 1969, p. 538)が引き合っに出される。

たしかに、とりわけ神々を創出する供犠という、シルヴァン・レヴィが強調したヴェーダのモチーフは、ユベールとモースの「供犠」論文にも取り入れられており(H. Hubert et M. Mauss, *Essai sur la nature et la fonction du sacrifice*, AS 2, 1899, p. 130 / M. Mauss, *Œuvres* 1, pp. 298f.)。またこのモチーフが間接的にデュルケームの供犠理解にまで反映されていた可能性も皆無ではあるまい。しかしながら、デュルケーム自身は、少なくとも管見の及ぶかぎりでは、『宗教生活』のなかで一度もレヴィには言及していない。そこで、ストレンスキーも苦し紛れに、レヴィの師であるアベル・ベルゲーニユの著作(Abel Bergaigne, *La religion védique d'après les hymnes du Rig Véda* [4 vols. F. Vieweg, 1878-1897], vol. 1, p. 133)から引用された『宗教生活』中の一節を孫引きするのである。

「供犠は、直接的な作用を、天空の現象に及ぼす」とベルゲーニユ氏

は述べている。供犠は、いかなる神的な作用もなしに、それ自体で全能である。……そればかりではない。「供犠は特に優れた原理なので、それは単に人間の起源のみならず、神々の起源にさえも結び付けられているのである」。(Srenski, op. cit., p. 123.; cf. E. Durkheim, op. cit., pp. 47f.)

すなわち、『宗教生活』において、神々を創出する供犠というモチーフが積極的に受け入れられ、しかもそれがレヴィの師であるベルゲーニユからの引用であることが、レヴィからの間接的な影響を示す拠り所とされているのである。けれども、ベルゲーニユからの引用がなされるのは、デュルケームが直接供犠を取り扱う箇所ではなく、宗教の定義を下すために、神観念による従来の定義を批判する文脈においてであった。さらにストレンスキーの主張にとつて致命的なのは、『宗教生活』におけるベルゲーニユの引用とほぼ同じ記述が、一八九九年のデュルケームの論文「宗教現象の定義について」のなかにすでに見出されるという事実であろう(E. Durkheim, *De la définition des phénomènes religieux*, AS 2, 1899, pp. 14f. / E. Durkheim, *Journal sociologique*, pp. 152f.)。供犠の過程においてけにえの聖性が獲得されるというユベール・モース説のデュルケームによる承認——しかし一度かぎりの言及——を、スミスのコミュニオン説の拒絶と同一視し、さらにこれを、神々が供犠から生まれたとする議論に重ね合わせる、ストレンスキーの網渡りの論法からすれば、デュルケームはすでに一八九九年の「定義」論文の時点で、レヴィの影響を、その師であるベルゲーニユを通じて間接的に受け入れ、さらに『社会学年報』の同じ第二巻に掲載されていたユベールとモースの「供犠」論文の立場をも基本的に受け入れて、スミスの影響を早々と退けていたことになる。とするならば、そもそもデュルケームは当初からロバートソン・スミスの説に与することはなかったという結論が導き出されてしかるべきだろう。

結局ストレンスキーのこの論考は、一見したところ、デュルケームの供犠観の変遷をブリリアントに「コンテクスト化」したように見えるが、実はシルヴァン・レヴィによる影響を際立たせるためにスミスからの影響をことさら矮小化し、新たな「コンテクスト」を捏造しようとしたとの誇り

を免れない。そのような暴走を許した最大の要因は、ストレンスキーの立論がデュルケームのテクストにきちんと即していない——「定義」論文におけるベルゲーニューからの引用の見落とし——という点、さらにユベール・モースとデュルケームとの共同作業の内実もまったく考慮に入れていない点に求められるだろう。ストレンスキーの立論は、思いつきの推測に推測を積み重ねて議論を肥大させていくが、その一端がテクストの読解不足に基づき誤謬と解つてしまえば、一挙に崩壊せざるを得ない砂上の楼閣であるといつても過言ではあるまい。ちなみにテクストの読みの問題としても一点指摘しておく、ストレンスキーは、デュルケームが、ドイツの自由主義的プロテスタント神学者アルブレヒト・リチユルに一度も言及していないと自信たつぷりに述べているが(Srenska, op.cit., p.118) 実は一九一年の「価値判断と実在判断」のなかで、一箇所リチユルは言及されている(E.Durkheim, *Sociologie et philosophie*, 1924, p.127)。

図らずも、いささか重箱の隅をつつくような議論を長々と続ける結果となつてしまつたが、このようなストレンスキーの轍を踏まないためにも、個々のテクストを入念に読み解きながら社会学年報学派の宗教思想の全体像を探っていくことの必要性は、すでに明白であらう。

(20) もとよりアナリズの内容、すなわちどのような著者のどのような著作が取り上げられ、それがどう論じられているかを分析する作業も、当然重要になつてくる。しかし小論では、論旨を明快にするためにも、さしあつたつて、その形式的側面にのみ着目することにした。

(21) E.Durkheim, *Lettres à Mauss*, p.69.

(22) 「家庭祭祀」については、第一巻に掲載されたデュルケームの「近親婚の禁止とその起源」が重点的にとりあげていたし、また「農耕に関する崇拜」は、第二巻のユベールとモースによる「供犠の本質と機能に関する試論」でも論及されていた。しかしこれ以降、社会学年報学派の宗教研究のなかでは、これらのカテゴリーはほとんど重視されなくなつていくのである。

(23) M.Mauss, *L'oeuvre de Mauss par lui-même. Revue française de sociologie* xx-1, 1979, pp.212f.

(24) 『社会学年報』では、その内容や構成に関する補足説明の文書は、当初

はほとんど見受けられない。第一巻と第二巻のデュルケームによる全体の序文、さらに第二巻に社会形態学セクションが創設されたときの、やはりデュルケームによる序が、その数少ない例である。ところがこの第五巻以降、各セクションレベルで、序やノートなどの補足説明的文書の掲載が目立つようになってくる。

(25) H.Hubert et M.Mauss, *Introduction à la sociologie religieuse*, AS 5, 1902, p.189. / M.Mauss, *Œuvres* 1, p.89.

(26) ユベールとモースは、第七巻の「宗教体系」の項目の冒頭で、「一つの宗教を構成する異なる種類の諸事実の間に、その体系的な全体を形成する規則的な相関関係が存在し」(H.Hubert et M.Mauss, *Systèmes religieux*, AS 7, 1904, p.217 / M.Mauss, *Œuvres* 1, p.91) さらに「この分類が事物の本性によつて命じられている」(ibid., p.218 / p.92)とささ述べている。いかえれば、このような体系を見出す根拠が宗教現象それ自体のうち内に在しているときみなされているのである。

(27) 実は、デュルケームは宗教現象ないしは宗教の定義を三度試みている。最初のもものは、一八九九年の『社会学年報』第二巻掲載の「宗教現象の定義について」の定義、二番目は一九〇六年から翌年にかけての公開講義「宗教・諸起源」における定義、最後が一九二二年の『宗教生活の基本形態』における定義である。三者を並べて引用しておく(傍点は原文における強調を示している)。

いわゆる宗教現象は、一定の諸実践と密接に結びついた強制的な諸信念からなつており、これらの実践は、これらの信念において示された諸対象に関連している——宗教はといえば、それはこの種の現象の多少とも組織され、体系化された一総体である(E.Durkheim, *De la définition des phénomènes religieux*, AS 2, 1899, pp.22f. / E.Durkheim, *Journal sociologique*, pp.159f.)。

宗教とは、聖なる事物に関連する諸信念と諸実践——特定の集合体に共通の諸信念と諸実践の体系である(E.Durkheim, *La religion: les*

origines, *Textes 2, Les Éditions de Minuit, 1975, p.70*°。

宗教とは、聖なる事物物すなわち分離され、禁止された事物に関わる、諸信念と諸実践との連帯的な体系であり、それらの信念と実践とは、教会と呼ばれる同一の道徳的共同体に、これに加入するすべての人々を結び付けている。(E.Durkheim, *Les formes élémentaires de la vie religieuse, 1912, p.65*°。

いずれの定義も、信念⇨宗教的表象と実践⇨宗教的行為との結び付きとして宗教現象ないし宗教をとらえようとする点では一貫していると言えるが、とくに最初の定義と後の二つの定義とは、かなりニュアンスを異にしている。この点に関して詳しくは、前掲拙著第四章第一節「発生論的方法と宗教現象の定義」を参照されたいが、さしあたって小論で注目したいのは、前者よりも後者において、体系としての宗教という視点が強調されてくる点である。デュルケームによる定義のこのような変遷が、本文で見た『社会学年報』宗教社会学セクションにおける宗教理解の枠組みの展開に対応したものと見ることも可能ではないだろうか。

(28) H.Hubert et M.Mauss, Introduction à la sociologie religieuse, AS 5, 1902, p.190 / M.Mauss, *Œuvres 1, pp.89f*.

(29) この「宗教生活の基本形態(formes élémentaires de la vie religieuse)」の用法は、この同じ表現がのちにデュルケームの著作の表題として採用される際とは、若干含意を異にしているように思われる。『宗教生活の基本形態』では、それは宗教一般を構成する本質的諸要素のことを指し、いいかえれば宗教生活一般の基本的な表出形態を意味する普遍概念であった(前掲拙著第五章第一節『宗教生活』の意図と方法)を参照のこと)。このようなデュルケームの用法の直接の起源は、一九〇三年の「社会学と社会諸科学」(E.Durkheim et P.Faconnnet, *Sociologie et sciences sociales, in E.Durkheim, Textes 1, p.135f.*)にまで遡ることができ(前掲拙著、二二五頁以下を参照のこと)。これに対して『社会学年報』の項目としての「宗教生活の基本形態」の用法は、本文でも見たとおり、「原始的」な宗教体

系とその「残存」としての「民間信仰」を包摂する個別的なカテゴリーである。しかもこの表現は、一九〇四年の第七卷以降、項目立てのなかからは姿を消すことになる。このような事態には、ユベール・モースによる宗教へのアプローチとデュルケームによるそれとの、微妙な差異が反映していると思われるが、その詳細の探求は今後の課題としたい。

(30) H.Hubert et M.Mauss, *Système religieux, AS 7, 1904, pp.217f. / M.Mauss, Œuvres 1, p.91*.

(31) 興味深いことに、宗教社会学セクションの項目立てに、トーテミズムの文言が現われるのは『宗教生活の基本形態』が刊行される直前の、第一卷(一九一〇年)になってからであった。もちろん、たとえば第二卷で取り上げられたフレイザーの「トーテミズム」(*Encyclopedia Britannica*の項目の仏訳)を初めとして、早い時期からトーテミズム関連の文献は取り上げられていた。また論文としても、第一卷に掲載されたデュルケームの「近親婚の禁止とその起源」以来、掲載論文の多くがトーテミズムに言及し、あるいはこれを主題としている。けれどもその位置づけは、かなり錯綜しているように思われる。たとえば、「近親婚の禁止とその起源」では、トーテミズムは普遍的な現象とみなされていた(E.Durkheim, *La prohibition de linceste et ses origines, AS 1, 1898, p.67n.2 / E.Durkheim, Journal sociologique, p.98n.2*)。これに対して第二卷のユベールとモース「供儀の本性と機能についての試論」では、ロバートソン・スミスへの批判に関連して、トーテミズムの普遍性には懐疑的な見解が示される(H.Hubert et M.Mauss, *Essai sur la nature et la fonction du sacrifice, AS 2, 1899, p.32 / M.Mauss, Œuvres 1, p.196*)。ところが、一九〇五年のモースの「トーテミズム・ノート」では、「トーテミズムは、われわれにとって、宗教学の一所与であり、考慮に入れねばならないほど十分に一般的な事実、より複雑でより確固たる諸他の事実を説明するためにそこから出発できるほど十分原始的(われわれはこの語を、それよりも適切な語がないために用いている)な事実なのである」(M.Mauss, *Le totémisme: note, AS 8, 1905, p.236 / M.Mauss, Œuvres 1, p.162*)と述べられ、トーテミズムの相対的な普遍性と「原始」性が承認されている。本文でも見たとおり、第一



卷以降、トーテミズムを基準として「下級社会の宗教体系」の類型化が試みられるのは、それが最も「原始的」な宗教体系としてとらえられているからである。デュルケームの『宗教生活の基本形態』にあっても、トーテミズムの「原始」性は基本的な前提となっているが、しかしその普遍性に關しては未決のまま放置されている(E. Durkheim, *Les formes élémentaires de la vie religieuses*, p.134)。現段階の私には、この間の推移を整合的に説明する用意はないが、社会学年報学派の宗教思想の全体像を探っていく上では、このようなトーテミズムの位置付けの変遷を説明する作業も、重要になってくるだろう。

(32) cf. AS 6, 1903, pp.225f. これは、「自然の存在および現象の宗教的表象」の小項目の冒頭に置かれた、表題も署名もない一文である。

(33) 『宗教生活の基本形態』における、社会学年報学派の宗教研究関連著作への言及箇所は以下のとおりである。( )内の数字は『宗教生活』における当該文献の言及箇所を示している。デュルケーム「個人表象と集合表象」(pp.299n.1, 327n.1, 606n.1)´デュルケーム「近親婚の禁止とその起源」(pp.153n.1, 196n.2, 236n.5, 450n.1)´デュルケーム「宗教現象の定義について」(pp.31n.1, 65n.1, 287n.1)´ユベールとモース「供犠の本質と機能に関する試論」(pp.54n.1, 442n.1, 482n.1, 551)´デュルケーム「トーテミズムについて」(p.152n.3)´デュルケームとモース「分類の若干の原始的形態について」(pp.16n.2, n.3, 156n.1, 202n.1, 204n.5, 210n.1, 216n.3, 631n.1)´ユベールとモース「呪術の一般理論素描」(pp.59n.4, 60n.3, 62n.1, 278n.2, 288n.3, 320n.1, 509n.1, 517f.)´デュルケーム「オーストラリア社会の婚姻組織について」(p.153n.1)´ユベール「宗教と呪術における時間の表象についての梗概的研究」(p.15n.1)´モース「エスキモー社会の季節的変動に關する試論」(pp.325n.1, 500n.1)´エルツ「死の集合表象に關する研究試論」(p.575n.1)´ユベールとモース「若干の宗教現象の分析への序論」(p.485n.3)´エルツ「右手の優越」(pp.17n.2, 208n.1)。とくに、「分類の若干の原始的形態について」と「呪術の一般理論素描」への言及箇所が多く、デュルケームにとっての両者の重要性が知られるが、それはともかくとして、これらの著作への言及は、彼が、社会学年報学派による宗教研究の総

体を、いわば共通認識としてみずからの著作のなかに組み込もうとしたことの証左といえるだろう。

(34) 宗教社会学セクションの大きな項目立てのなかからは、「呪術」と「民間の信念と実践」が除外され、さらに小項目のなかでは、神話と口誦儀礼が意識的に除外されている(E. Durkheim, *Les formes élémentaires de la vie religieuses*, 1912, pp.142, 427n.1)。

付記II小論は、二〇〇六年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)(課題番号一七五二〇〇五七)「社会学年報学派による宗教研究の再検討」に基づく研究成果の一端である。

〔共生社会教育講座〕

